お母さんのさいほう箱

岩手県　北上市立立花小学校　五年　軽石（かるいし）　きらり

「引き出しから、さいほう箱取って。」
茶の間の引き出しを開ける。
いつもの箱を、つくえに置いた。

「何か、古いよね。」
私のが新しい分、よけいに古く思える。
「うらを見てごらん。」
「えっ。」
五年一組
佐々木ひかる
うすくなって、ところどころ消えかけた字。
五年生のころのお母さんの字だ。
お母さんが、
私と同じ年に使い始めたさいほう箱。
はりが、すいすい進んでいく。

糸が、一直線にならんでいく。
静かなひとときが流れる。
「はい。」
たたんで手わたしてくれたのは、
私にぴったりの長さになった新しいズボン。
さっそく合わせてみた。

私の新しいさいほう箱。
お母さんの古いさいほう箱。
どちらも大切なさいほう箱。
「お母さん、ずっと使ってたの。」
「そう。これからも、ずっと使うよ。」
白い部分がうす茶色になったさいほう箱。
お母さんのやさしさがつまっている。
とってもすてきなさいほう箱。